

エドモンド・バークの「趣味の基準」論

高橋 和則

はじめに

- 1 先行研究の整理
 - 2 趣味の多様性論批判
 - 3 多様性発生原因の分析
- 終わりに

はじめに

趣味は18世紀英仏の文壇の一大論点であったと言っても過言でない。両国とも17世紀末にはそれが始まっており、文芸の分野での従来の古典主義的な規則に対する反発が一つの切っ掛けであった。イギリスでは、デニス、テンプル、ファルカーらが、シェイクスピアなどを例にとって作家自らが規則を作り出すべきことを論じ、フランスでは古代派ボワロー対近代派ペローが論争を展開していた。このフランスの古代近代論争は、18世紀初頭に再燃し、社会の進歩を墮落とし古代人の模倣を論ずるダシエ夫人と、文学は科学とともに進歩するとしたウダール・ド・ラ・モットのホメロス論争が起きている（濱下, 1993: 170, 中川, 1994: 296）。

こうした議論の背景には何よりも中産階級の新興がある。彼らが学問芸術を享受し始め、それに伴い17世紀までの宮廷、貴族中心の学問芸術の享受のあり方を相対化し始めたのである。その差異は趣味とその多様性に焦点を当てさせた。だが趣味はより広い含意を持っている。イギリスに関していえば「社交上の洗練された振舞、都会性、芸術鑑賞能力などに対する

志向が、17世紀の遺物である貴族、宮廷的な行動様式とは異なる新興中産階級の行動、生活理念として、趣味という概念に集約された」のである（濱下、1993: 170）。このように趣味は文明社会における生活と密接に結びつく概念になっていた¹⁾。

18世紀イギリスでも趣味は、芸術の享受者の変化と増加により多様化が見られた。ここで趣味の基準が問題となる。この多様化を観念連合によるものとして捉え、趣味の基準は客観的には存在しないとする相対主義的な議論も登場したのに対し、その中から趣味の基準を見出そうとする議論も現れる。その探求に関して「アディソン、ヒューム、バーク、ケイムズなどは心理学的探求を試み、他方シャフツベリやハチスンなどは『内官』のような直観能力を想定した」（濱下、1993: 171）。

ここに挙げられたエドモンド・バークに関して言えば、政界進出前の文筆家時代に発表した『崇高と美』の序論「趣味について」で行った議論を指している。本稿ではバークのこの「趣味について」を検討することにしたが、そのためにはバークがどのような環境の中で執筆したのかを把握する必要がある。周知のことではあるので、ここでは必要最小限にとどめておくことにしたい。

時間軸に沿って言うと1756年にアレクサンダー・ジェラードが『趣味論 (*An Essay on Taste*)』を発表しているが²⁾、その翌1757年1月に、デイヴィッ

1) 大河内はさらに踏み込み「近代的な商業社会においては、欲望や野心は商業発展のためのエネルギーとして理解されるようになる。だがそうした情念が歯止めなく暴走すれば、社会秩序は崩壊してしまうだろうという懸念は依然として存在した。それゆえ、個々の市民の情念を肯定しながら、彼らを調和ある社会へとまとめ上げていくような原理が必要になっていたのである。そうした原理は理性ではなく、情念を統括する心的機能である想像力の洗練の中に求められるようになり、そうした洗練された想像力は趣味と呼ばれるようになった」と論じている（大河内、2019: 34-5）。

2) プロムウィッチは踏み込んだ検討はしていないものの、バークの議論とこのジェラードの『趣味論』との関係を示唆している（Bromwich, 2014: 60）。だが

ド・ヒュームが「趣味の基準について」を含む『四論文集』を出版している（Hume, 1757）。直後の同1757年4月にバークが『崇高と美』の初版（「趣味について」は含まれていない）を出版するが、フランスでも同年にモンテスキューの「趣味」の項を含む『百科全書』第7巻が出版されており（Montesquieu, 1757）、翌1758年、バークは、自身の編集する『アニュアル・レジスター』にこのモンテスキューの「趣味」の書評を掲載している（AR, 1758）。そしてバークはさらに翌1759年に『崇高と美』第二版を出版する。「趣味について」はこの第二版に序論として新しく付加されたものである。こうした経緯からしても、バークの趣味論を考察するにあたって、ヒュームやモンテスキューの議論を無視するのは適切とは言えないであろう。

ところで、後に確認するが、これまでは『崇高と美』の本論の研究は蓄積があるのに対し、序論たる「趣味について」の研究は手厚いものとは言えないように思われる。本稿では、この「趣味について」に焦点を当て、バークの趣味論を検討することとしたい。だがバークが踏まえていると思われる広範な議論をここで全て検討の対象とすることには多大な困難が予想される。ひとまずバークの議論の一端を明示することで満足する他はない。

1 先行研究の整理

さてこの「趣味について」の研究は本論である『崇高と美』についての研究に比べて遥かに少ない。その中で現在でも基本となるのはおそらく

他方で、ジェラードの趣味論は、ハチソンの影響を大きく受けている点でバークの議論とは異なることも指摘される。ハチソンは趣味判断の普遍性を、特定の対象に万人が美を感じるように神があらかじめ定めたという摂理論的美学だが、これはケイムズやジェラードに受け継がれているものの、ヒュームやバークは普遍性の根拠として、神ではなく人間の心的機能、身体的機能の内部に求めている。この差異は無視しがたいという指摘（大河内, 2019: 52-4）は踏まえておくべきであろう。

ボールトンの研究であろう (Boulton, 1987)。彼は、バークが「趣味について」を執筆したことにはヒュームの「趣味の基準について」が刺激になっている、と指摘し、応答するのを感じたものと論じている。そして両者を比較し、仮定の多くは同一なのに結論は分かれたと分析する。それは、趣味の基準は決定できるかどうか、という点で、それに懐疑的なヒュームに対し、バークは可能だという態度を示していると論じた。ここでボールトンはヒュームについては「趣味の基準について」よりも『人間本性論』の議論を取り上げ、感覚はそれを支配する共通の原理と常に両立する訳ではなく、人々は感覚経験に対し異なる反応をするため、趣味の法則を科学的に証明することは不能だと結論したとしている。それに対し、バークは感覚を我々の観念、快樂の基本であり、それは不確かでも恣意的でもなく、趣味の全土台は全てに共通しているとし、これに関するバークの中心的主張は「感覚の快は人間の地位の高低、学の有無に関係なく万人に同一である」(OT, I: 220-1=1999: 21-2) という点に求められるとする (Boulton, 1987: X)。ボールトンは1997年においても「ヒュームの『趣味の基準について』」の出版がバークに反応することを要請した。ヒュームは趣味の基準の決定の可能性について懐疑的だったが、バークは見出し得ると確信していた」として、この見方を変えていない (OT, I: 196 n.1)。

このようにボールトンはヒュームとバークの違いを、基準の有無の違いとして明確な対立関係を把握している。この研究は大きな影響力を依然として持っており、岸本広司は部分的な留保を付けながらもこのボールトンの把握を大枠で受け入れている。「『趣味について』という序論を付したのはヒューム説を批判するため、あるいはヒュームの投げかけた問題に解答を与えるためであったと言われていた。この解釈が妥当であるか否かは問わぬまでも、バークが趣味の基準設定に関してはヒューム以上に強い確信を持っていたことは事実であった」(岸本, 1989: 159)。ただし岸本はボールトンが行った、「感覚」論的分析よりも、バークの趣味論を道徳との関連づけで理解しようとしている。バークは出身地ダブリン市民たちの趣味

の低さからその改善を企図した、という文脈から趣味論を把握し、「悪しき趣味は人間を快樂や技巧の虜にして人々の魂を墮落させ、社会を腐敗させて、それをまやかしの文明国へと導く」と解している（岸本、1989: 156）。こうしてバークは趣味の基準の確立へと向かうが、「趣味の基準が全ての人に同じである（……）とするならば、趣味の相違は何故に生じるのであろうか」と立論し、「バークによれば、それは人々の感受性と判断力が各人各様であり、それらの程度が個々人において非常に異なっているからである」と理解している（岸本、1989: 160-1）。この立論は極めて重要なものと思われるが、それに与えられた解答には多少検討の余地があろう。極論すれば、これでは結局趣味に基準がないという、バークの意図とは正反対の主張に組することになりかねないようにも思われるからである。

こうしたポルトンに代表される、基準の有無としての両者の差異という把握の仕方に対して、近年では両者の違いを必ずしもそうした明確な対立関係ではないものとして把握しようとする傾向がある。濱下昌宏は「趣味論に関わった論者たちの共通前提には、人間の感覚や精神には何らかの同一的なものが存在しており、それゆえに趣味の多様性の中に一定の法則や規則があるのだと考えた」として（濱下、1993: 171）、ヒュームもバークもその一員であるとしている。ただしそれはむしろヒュームとバークが同じであることを主張するものではなく、「ヒュームにとっての趣味基準は上記の（引用者注 濱下が抽出した六つの）条件を完全に満たす場合に初めて想定できることである。それはいわば努力目標であり、極めて理念的である。ここにバークの場合の自然的趣味の自明的実在性との顕著な対照をなしている」のであり（濱下、1993: 186）、ヒュームが理念的理想的であるのに対し、バークは自然的事実的であると整理されている。

バーク『崇高と美』の研究において画期をなす論説を提供したりチャード・バークもヒュームとの対抗関係の下にバークを理解しようとはしていない。むしろ趣味の基準に関してヒュームとバークの近接性を指摘し、ヒュームの仮定に賛同していると論じている（Bourke, 2015: 158）。そこで

ヒュームに対し、パークにとっての問題は才知 (wit) にあるとしている。才知はこの種の議論ではジョン・ロック以来しばしば論じられる概念で、パークは差異を発見する能力としての判断力に対し、類似を発見する能力として才知を位置づけるが、類似による快が基準によってどう判断されるのかを問題にしていたトリチャード・パークは論じている。

岩撫明はポルトンとは対照的に、より二者を近接的に理解している。ヒュームが「ある程度趣味に基準はあるが、現実的には完全なる基準を求めるのは無駄であると主張しているところは、パークの(……)主張と同趣旨である」と判断している(岩撫, 2017: 25-6)。

以上のように、パーク「趣味について」の理解は、必ずしも見解の一致を見ている訳ではないが、共通している点は、まず第一に、やはりヒューム「趣味の基準について」との関係を重視しているというところである。これはパーク「趣味について」の成立経緯から考えても当然のことであろう。だが濱下を除くとヒュームの議論の検討を直接行っているものは多くない。ポルトンにしても取り上げているのは、「趣味の基準について」ではなく、『人間本性論』である。そして第二に、ヒューム以外は余り考慮されていないことが挙げられる。先ほど確認したように、例えばモンテスキューの「趣味」という百科全書の項目は、パークが自身の「趣味について」出版以前に書評を掲載しており、決して軽視しているとは思われないが、しかしヒュームほど関係を取り上げられてはいないように思われる。それはもちろんパークが「趣味について」でモンテスキューの名前を挙げている訳ではないということも要因の一つに違いない。それゆえパークが取り入れたのはモンテスキューの議論であって、他の誰でもない厳密には立証できない。ここでもせいぜい「状況証拠」を提示するに留まる。

さて、こうした点は少なくともこれからパーク「趣味について」を検討する際には、念頭に置かれるべきことであろう。だがそれらを余すことなく理解することは、いかにも困難である。本稿では以上を踏まえてささやかながら検討を進めることとする。以下では、まず趣味の多様性を肯定

する立場に対してバークがどのような態度を示したのか、次いでその多様性が発生する原因についてバークはどのように分析したのかを、ヒュームやモンテスキューの議論を手摺としていささかなりとも明らかにしたい。

2 趣味の多様性論批判

冒頭でも確認したように、趣味は古典主義との関係で論じられた。古典主義は、美が対象に備わっている実在的なものであるとし、幾何学的な規則を重視する立場である。古典主義者にとって趣味とは、単純化すると、実在する美を見て取ることであり、また規則に則った作品を評価、制作することとなる。モンテスキュー、ヒューム、バークはいずれもこうした古典主義に対しては批判的だったと言える。

ヒュームの古典主義批判は規則についてに向けられている。ヒュームによれば「想像力のほとばしりを抑え、あらゆる表現を幾何学的な真理と正確さに帰することは批評の法則に最も違反する」として古典主義的な幾何学的規則の重視を批判する。ここでヒュームはもちろん無規則を称揚している訳ではない。「詩は正確な真理を決して提出しないが、天才が観察によって著者に発見させた学芸の規則によって制限されなければならない」のである（Hume, 1985: 231=2011: 195）。当時「天才」は従来の古典的な規則に基づかない作品の創出を意味する概念として用いられていることを考え合わせればヒュームの議論が古典主義批判であることは明らかであろう。

ヴォルテールは『百科全書』の項目「趣味」においては古典主義的な客観主義の立場で論じたと言ってよい。つまり良い趣味とは実在の美を識別できることであり、翻って悪い趣味とはそれができないことを意味すると定式化している。それに対し、モンテスキューは明らかに主観主義的である。モンテスキューは趣味を「事物から与えられる快の程度を敏感に、かつ即座に発見する能力」とし、趣味は実在的なものを対象とするのではな

く、快という魂の内部に生起する性質を対象とするとしている(中川, 1994: 307)。

パークはモンテスキューと同様、趣味を主観主義的に捉えている。パークは趣味という概念については、「動揺と混乱に絶えず陥りがち」であるが故に、定義には重きを置かないとしつつ、「趣味という言葉で意味するものはただ、想像力の作品ないしは優雅な芸術品によって触発されてそれに関する判断を作り上げるところの、心の一つまたはそれ以上の能力のことに過ぎない」と定義づける。「心の能力」とし、そして続いて快を基本として考察するパークは、明らかに古典主義的な実在性を拒否しているとみてよいだろう。

このように三者はいずれも古典主義的な趣味理解からは脱却している。となると反射的に趣味は多様なものであることを免れ得ないことになろう。では趣味とは多様である他はなく、相対主義的に捉えるべきものなのだろうか。

この点についてのヒュームの議論は単純ではない。最初にヒュームは相対主義的趣味論を略述する。これは、趣味は極論すれば各人各様であり誰かの趣味が優越するとは言えないという「趣味の自然的同等性」を前提としていると指摘する。「美は物自体のうちにある性質ではない。それは物を見る心の中のみ存在する。それぞれの異なる美を認識する」のであり「あらゆる個人は他人の感情を制限することを要求することなく、自分自身の感情に従うべきである」という論理になる(Hume, 1985: 230=2011: 194)。ヒュームはここでこの相対主義をそのまま受け入れて議論を進めている訳ではなく、自己の議論の足掛かりにしているだけである。にもかかわらず、この論理は「ヒューム自身が『人間本性論』で展開した彼自身の哲学的立場に極めて似通って」おり、「趣味の基準を発見することの不可能性を主張する立場としてヒュームが紹介する哲学とは、ヒューム自身の懐疑主義の立場に他ならない。もしそうであるなら、ヒュームが趣味の基準へ到達する上での最大の障害は、彼自身の合理主義的な懐疑論」であっ

て、この「趣味の基準について」という論考には「ある種の『演技性』が存在しているといえる」のである（大河内, 2019: 61）。というのも、ヒュームはそれに続いて、この論理は現実においては貫徹されないことを述べているからである。本稿はヒュームの趣味論そのものを中心的検討課題としている訳ではないため、この点についてさらに踏み込む余裕はないが、ヒュームは、趣味の基準の有無についての議論の全体をそのまま体現することを意図しているようにも見える。ただ傾向としては、やはり趣味の基準の存在へと傾いていることは否定しづらい。

ヒュームによれば、相対主義的趣味論が前提としている「趣味の自然的同等性」はしばしば恣意的に目隠しされる。常識的、直観的に「オーグルビーとミルトン、あるいはパニヤンとアディスンとの間に同等な天分と優雅さを主張する人は誰でも、モグラ塚がテネリッツと同じ高さであるとか、池を大海と同じ大きさだと主張した場合と変わらぬ突飛なことを弁護することに他ならないと思われるであろう」（Hume, 1985: 230-1=2011: 195）。ここからして「趣味の自然的同等性」を普遍的なものとして受け入れることはできない。

やはり「多様で気紛れな趣味の中に、賞賛と非難の一般原理があるように見える」（Hume, 1985: 233=2011: 196-7）。この点をヒュームは繰り返し指摘している。「趣味の原理は普遍的であり、全ての人間において完全に同一とは言えないまでも、それに近い」のであり、「趣味の一般原理は人間本性においては斉一的である」（Hume, 1985: 241, 243=2011: 201, 203）。このようにヒュームは「趣味の一般原理」が斉一的なのは人間本性においてであるとす。それゆえに「内的構成の原初的構造から、快を感じさせたり (please) 不快を感じさせたりする (displease), 特定の形式や性質がある」と分析している (Hume, 1985: 233=2011: 197)。やはりヒュームも趣味は実在的な美の識別ではなく、快の問題だとしているのがわかる。

他方でモンテスキューもこれについて論じている。先ほど確認した通り、モンテスキューも趣味とは快の問題だとしているが、ここでモンテス

キューは快に二種類あることを指摘している。「我々はここで自然から魂に到達する快と、身体との結び付きから魂に至る快とを区別していない」として、「自然的快 (plaisir naturel)」と「獲得された快 (plaisir acquis)」を区別する。「同じやり方で同じ理由で、我々は自然的趣味 (goût naturel) と獲得された趣味 (goût acquis) を区別する」(Montesquieu, 1757: 762 para.16)。ここでモンテスキューが言う「自然的快」そして「自然的趣味」は、ヒュームの言う「人間本性において斉一的な」快であり「趣味の一般原理」と重なるものと捉えてよいだろう。したがってモンテスキューは「自然的趣味」という趣味の基準が存在することを前提にしている。それに対して「獲得された趣味」は「身体との結び付き」から発生する。つまり個人個人の経験などから得られたものであって、その分個体差が存在する趣味だということになる。これが趣味の多様性を導き出すと把握してよい。

もちろん趣味は快に基づく。「趣味の基準となる快の源泉を知ることは良いことである。自然的快と獲得された快を知ることは、我々の自然的趣味と獲得された趣味をはっきりさせることに役立つ」とモンテスキューは定式化している (Montesquieu, 1757: 762 para.17)。

だがモンテスキューによれば「自然的趣味」、つまり趣味の一般原理には一つの特徴がある。その点を把握しておこう。「まず、趣味を知るために、我々の快の源泉を知ることで十分だと考えられている。そしてその点について語っている哲学の言うことを読んで、趣味を理解したと考えている。そして大胆にも作品を判断できると考えている。しかし自然的趣味は理論によって知られるものではない。知られていない規則の素早く上品な適用である」(Montesquieu, 1757: 762 para.21)。つまり「自然的趣味」は「知られていない規則」によって形成されていると性格づけている。

だが何故そうなのだろうか。モンテスキューは次のように分析する。「ここで言えるのは、そして趣味を形成するために与えられる全ての教訓は、考えることができるのは獲得された趣味だけだということである。つまり自然的趣味は依然として間接的にしか考えられず、直接的に考えることが

できるのは獲得した趣味だけだということである。何故なら双方が影響を与え、変化させ増減させるからである」（Montesquieu, 1757: 762 para.22）。つまり自然的趣味はすでに変形してしまっているのだから、それそのものを取り出して吟味することはできないのである。それゆえに自然的趣味の規則は「知られていない」。

このある種の不可知論は、しかし、趣味の相対主義とは異なっている。本来的には次節で検討すべきことだがここで議論を先取りすると、モンテスキューは、趣味の一般原理の存在と趣味が多様なものに見えることを同時に説明することに成功している。趣味の相対主義者が強調するように、一般原理が、少なくとも外見的には、ないように見えるのは「獲得された趣味」の影響を受けていない本来の姿を維持した「自然的趣味」はないからである。だがそれは「自然的趣味」の不在を意味している訳ではない。我々の目に見える「獲得された趣味」は「自然的趣味」から完全に独立した存在ではなく、「自然的趣味」から影響を被っている。おそらく「自然的趣味」という基礎の下に、経験などによって「獲得された趣味」が構築されることになると把握されているのではないだろうか。モンテスキューは以上のような議論を通じて、趣味の原理を、存在するものの不可知的なものとして把握しようとしているのである。

ではバークはどのように趣味の原理を説明しているのであろうか。まずバークは理性と趣味を比較し、「正しい理性についての確実な格律」については体系化された一方で、趣味の原理については依然として不十分であると断言する。そして不十分のままになっていたのは「もし人々がこの趣味という主題について見解がまちまちになったとしても、彼らの間の見解の相違は前者の場合のような重大な帰結を生むことがない」からだとしている。「そうでなかったならば私は趣味の論理学（という呼称を使うとして）も十分にそれと同程度には開拓され、我々はこの種の題材についても、もっと直接的に案なる理性の領域に属すると思われる題材と同程度に確実な論理に基づいて論議するようになったらと確信する」。以上からバークは

趣味の原理について次のように言明している。「皮相な観察に基づいて、趣味は個人によって質の点でも程度の点でも全く多様であるからこれ以上に不確定的要素の多いものはないと考える人々にとって、あるいは逆説的に響くかもしれないが、私はこの種の趣味に関する原理が存在すると信じている」のである (OT, I: 197-8=1999: 17-8)。

では、趣味の相対主義者、一般原理の存在に対する懐疑論者についてパークはどう認識しているのか。懐疑論者たちは「人間の感覚が、別の人間には別の事物のイメージを与える」ことになると論ずることになるが、パークはそうした議論が成立するのかについて疑問を抱いている。

「もし人間の感覚が、別の人間には別の事物のイメージを与えるなら、この懐疑的な行き方は、あらゆる主題についてのあらゆる種類の推論を空しく無意味なものにするだろう。そこには、我々の知覚の一致について疑いを挟むよう我々を説得した懐疑的推論も含まれる」

つまりパークは懐疑論者は何故自らの懐疑論を懐疑しないのかと問うている。懐疑論者は懐疑論において不徹底であり、その点でこうした議論は、一般原理が存在するという議論に対して説得力という観点からしても、少なくとも優位に立っていると論拠はないとパークは理解しているであろう。

さてパークが趣味に関する原理をどう論ずるかの検討に入る前に、関連する二つの点を踏まえておきたい。まず第一に、パークのモンテスキュー「趣味」の書評についてである (AR, 1758: 311-9)。パークによる『アニユアル・レジスター』の書評欄は、書評というより紹介に近いもので、書評者自身の文章は短い。そこではモンテスキューの「趣味」における議論の説得力を高く評価している。「次のことも (読者にとっては) 不快なことではないであろう。我々とは状況も習俗も習慣もかけ離れた国を観察しても、この項目の結論は維持されるということであり、この結論は趣味の改

善がイングランドにおける我々の中にもたらされるという最高の観念が伴うということである」(AR, 1758: 318)。だがこうした短い評言を除くと、ほとんどが引用によって構成されている。翻訳者の記名はないが、正確な翻訳であり、省略した部分はあるものの、モンテスキューの「趣味」のかなりの部分を訳出している。その訳出に関して興味深いのは、訳出が始まるのが前段までに引用した部分の直後からだという点である。つまり「自然的快、趣味」「獲得された快、趣味」については全く訳出されていない。

第二は、バーク『崇高と美』本論についてである。ここでは検討の対象ではないため深入りすることは控えるが、一つだけ確認しておきたい。先ほど示した通り時間軸で言えば、バークは『崇高と美』を出版した後にモンテスキューの書評を執筆し、そしてその後に、「趣味について」を執筆している。ここで先に執筆した『崇高と美』の第一編に目を向けてみよう。第一編第二節でバークは快苦について論じており、これまでの快苦論についての問題点を指摘した上でバーク独自の快苦論を展開している。バークによれば、従来の快苦論では快を苦が除去された状態と定義づけているが、それは快苦を相互依存的に理解する態度を導き出してしまふ。だが実際は、全てがそうではなく、快苦はそれぞれ独立して理解すべき場合も少なくないとして、独自に「積極的な快」「積極的な苦」という概念を提出している（さらに別の独自の概念を提示してもいる）。そしてこの新たな概念を使って第二節以降議論が展開されている。

ところが他方、その後に執筆された「趣味について」ではこの概念は使われていない。先に見たようにバークも趣味の一般原理は存在するとしているが、それを主張する際に、次のように論じている。

「これら個々の味覚に属する自然的快苦 (natural pleasure and pain) は慣習その他の原因によって様々に変質されたと言われるが、しかしその場合でも、本来の自然的嗜好 (natural relish) と獲得された嗜好 (acquired relish) を弁別する力能は最後まで存続する」

「積極的な快・苦」ではなく、ここで使われている概念は「自然的快・苦」になっている。しかも、それに対応して「自然的嗜好」と「獲得された嗜好」が使われている。これがモンテスキューの言う「自然的趣味」と「獲得された趣味」に重なっていることは確認するまでもないであろう。同じく趣味の一般原理の存在を主張するヒュームも、後に検討するが、当然多様化しているように見える理由を論じている。だがその際にこの概念を用いてはいない。ここでパークはモンテスキューの趣味論を取り入れていると考えることは無理のないことではないだろうか。

さて、このようにパークも「自然的嗜好」の存在を肯定し、したがって一般原理の存在を肯定している。だがここでモンテスキューとの違いも把握することができる。モンテスキューにおいて「自然的趣味」の存在は肯定するが、ある種の不可知論的な議論を展開していた。すでに「獲得された趣味」によって変形されており、純粹形態で「自然的趣味」を取り出すことはできないとされていた。そしてそれが趣味が一見多様であり一般原理がないかのように見える理由をなしている。それに対し、パークは「自然的嗜好と獲得された嗜好を弁別する力能は最後まで存続する」としているのである。

とすると、パークは趣味が何故多様に見えるのかをどう説明しようとしているのだろうか。そこが問題になる。次節でヒュームとの比較で把握してみることにしよう。

3 多様性発生原因の分析

もちろんヒュームは先ほど指摘した通り、パークほど徹底した一般原理論者ではない。「内的組織や外的事情のいずれにも非難する点が全くない場合、ある程度の判断の相違は避け難く、対立する感情を調整しうる標準を求めても無駄である」としている。ヒュームが趣味の基準に懐疑的だと理解する立場は少なからずこの言及を重視しているであろう。確かにこの

点でヒュームは最終的に懐疑論者だと理解することはできる。しかしむしろ興味深いのは、ヒュームは素朴な懐疑論者ではないという点であろう。上記のような場合以外は一定程度基準を求めることはできているのであり、実際にヒュームは素朴な懐疑論者とは異なり、趣味が多様なものに見える原因について詳細に分析を施している。素朴な懐疑論者と明確に一線を画するのはその点であろう。

その原因についてヒュームはまず次のように指摘している。

「美や醜についての我々の感覚が依拠している一般原理の影響を妨げたり弱めたりする内的諸器官には欠陥が数多く繁雑に生じる。ある対象は心の構造によって本来快を与えるようになっていながらもかかわらず、全ての個人において等しく快が感じられるだろうと期待はできない」（Hume, 1985: 234=2011: 197）

この「内的諸器官の欠陥」で最もわかりやすいのは、例えば風邪をひいて熱が出た時に味覚がおかしくなる、というような事例である。それ以外に「特定の偶発事」による妨げも原因となる。また「より洗練された情動の感受性を伝えるのに必要な想像力の繊細さの欠如」、さらに美を見分ける「熟練の欠如」が原因として指摘される。それに加えさらに「偏見」も多様化の原因となる。「偏見が健全な判断を破壊する」ことはよく知られている（Hume, 1985: 234-9=2011: 197-201）。

しかしこれらよりも深刻な問題がある。それは個人的なものと集団的なものである。個人的なものについては「特定の人々の特有な気性(humours)」である。「我々が特有な性向や気質 (turn and disposition) に合ったものを選好 (preference) を感じないということはほとんどありえない。(……) 選好を決め得る基準はない」（Hume, 1985: 243-4=2011: 205）のである。高尚なものや優しいもののいずれを選好するか、喜劇と悲劇のいずれを選好するか、どの文体を選好するかといった点にかかわるが、どうしても選好

したものを高く評価する傾向にあるということである。

だがより問題なのは、集団的な「我々の時代と国に特有な習俗 (manners) と意見」である。「我々とは異なる一連の習慣を記述したものより、我々自身の時代や国に見いだされるものに類似した光景や性質を好む」ということを意味する。これまでヒュームは客観的な態度を崩さなかったが、ここでそこから一歩踏み出している。

「道徳や繊細さの観念が、ある時代から他の時代に変化する場合、また悪徳たる習俗が非難と否認の適切な性質によって表わされずに記述される場合、これは詩を傷つけることになり、真の醜さと認められなければならない。私はそのような所感をくみ取ることはできないし、そうするのは適切ではないと思う」

「幾人かの古代の詩人一時にはホメロスやギリシャの悲劇詩人でさえ一によって描かれた人物に認められる非常に顕著な人間性 (humanity) と繊細さの欠如は、彼らの高尚な作品の価値をかなり低下させ (……) 我々はそのような粗野な (rough) 英雄たちの運命や所感に関心を持たない」 (Hume, 1985: 246 = 2011: 205)

習俗と意見が異なっていると、趣味の基準の作用が妨げられ評価が低くなる。これは明らかに古代と近代の差異についてに重なる。そしてヒュームは古代の習俗の一部は人間性を欠いた粗野なものであることから、低い評価こそが正しい評価であるとする。ここでヒュームの論理においては、趣味の議論は人間性の維持という枠内で行われるべきものであり、それから逸脱しては趣味の問題にならないということであろう。

おそらくこの原因は、モンテスキューのいう「獲得された趣味」に重なるものと思われるが、ヒュームは (当然ながら) その概念で説明はしていない。

さて、ヒュームは趣味の一般原理の発現が阻害され多様に見える原因を

以上のように分析して論じている。この達成を受けてバークはどのように論じようとしているのかを確認してみよう。

先に見たようにバークは「趣味の論理学」を目指している。それはどのようなものなのか。バークはヒュームの挙げた原因も当然だが念頭に置いている。独自のものは、それに一つの枠組みを与えようとしている点である。

まずバークは趣味は基本的に判断力（judgement）の問題であるとする。だが判断力の問題としてすぐに論じようとはしない。外的対象を把握する際は、まず一次的には感覚が、そして二次的には想像力が作用する。そして感覚、想像力、判断力の三つにそれぞれ趣味の問題が現れるとしている。むしろこれまでこれら三つを区別せずにはばばらに論じていたと認識し、それらを区別した上で整理すべきだと思考しているというべきだろう。そしてバークはこの三つの次元で全て趣味の一般原理が存在すると論じている。

風邪を引いた時に味がわからなくなって味の良し悪しが判断できないのは、判断力の問題ではなく、感覚の問題である。この感覚の次元での趣味の多様性は、例えば煙草の味に代表されるようにしばしば「獲得された快・嗜好」に起因する³⁾。しかしそれを除くと「各種の感覚の快は感覚の中で最も曖昧なものと言われる味覚の快ですら、人間の地位の高低、学の有無に関係なく万人の場合で同一」であると結論する（OT, I: 200-1=1999: 21-2）。

ではヒュームの挙げていた美を見分ける「熟練の欠如」と「想像力の繊細さの欠如」という原因はどうであろうか。画家や彫刻家によるありふれた人間の模造よりも、より優れたそれを愛好する趣味はどのように説明されるのか。これは感覚の問題ではなく、バークは想像力の次元に属する問題であるとする。

3) しばしばテイストは味覚を意味する故に感覚の次元では味覚が中心に思われるが、バークは味覚の方が「獲得された快」に左右されやすいとする。むしろ「視覚に基づく快は味覚の快に比べて不自然な慣習や連合によって攪乱され複雑化され変更されることが稀」だとしている。

バークは想像力を「感覚の再現」であるとし、異なる事物の間、例えば人間と模造の間に類似が見出される時に想像力を喜ばせるとしている。この次元での趣味の外見的多様性はどうか捉えられるのか。ある模造に快を覚えた鑑賞者が、次にさらに精巧な模造に快を覚えた場合をバークは例に挙げる。ここで彼は第二の模造により快を覚えるが、ここで趣味は変わっておらず、変化したのは知識であるとする。つまり知識が改善されたが故に快の対象が変化したのである。

一流の模造を普通の鑑賞者が見て高く評価したにもかかわらず、靴屋が靴の部分に欠陥を発見し、解剖学者が筋肉の部分に欠陥を発見し、低く評価することはある。普通の鑑賞者との違いは趣味の違いではなく、知識の違いである。ここで「自然的趣味」は普通の鑑賞者のものである（「自然的なよい趣味」）。これは変化しない。ただ「この知識という原理は経験と観察に依存するものであって何らかの自然的な能力の強弱に依存しない故、極めて偶然である。我々が必ずしも極めて厳密にはないが普通に趣味の違いと呼ぶものが生まれるのは、この知識における差異からなのである」（OT, I: 202=1999: 24）。そして普通の鑑賞者と靴屋、解剖学者にも共通している点はある。「それはこの自然的対象が正確に模倣されていると各人が感ずることから生ずる快」であり「趣味は自然的である限りで、万人にほとんど共通する」（OT, I: 204=1999: 26）。バークはこの想像力の次元においても「自然的趣味」は共有されているのであり、外見的多様性の原因は知識の多寡に求められると分析している。

ではヒュームの言う「我々の時代と国に特有な習俗と意見」という原因はどのように理解されるのだろうか。これは絵画、彫刻よりも詩、演劇によりよく当てはまる問題であろう。何故この登場人物はこのような行為をするのかは、習俗や意見、つまりその社会の通念などが合致していれば摩擦なくスムーズに理解できるし、それらにずれがあればあるほど摩擦が増大し理解、享受に困難が発生するだろう。つまり登場人物の行動とそれを支える情念、心理などの理解と関連することであり、ヒュームは習俗の違

いはその理解に大きな影響を与えるため、趣味が多様化しているように見えてしまう原因となると分析したが、バークはどうであろうか。

バークはこの点についてホラティウスの『詩論』のとりわけ以下の部分を念頭に置いていると思われる。「分別を持つことは詩を正しく作る第一歩であり、源である。題材はソクラテスの知恵を盛った書物が示してくれるだろう。目の前に置かれた題材を見るなら、言葉は後から進んでついでくるだろう。祖国に対し、友人に対しどんな義務を負うか、親への愛、兄弟と客人への愛はどうあるべきか、元老院議員の、裁判官の務めは何か、戦地に派遣された指揮官の任務は何か。これらのことを学んだならば、それぞれの人物にふさわしい性格を与えることができるだろう。私は勧めたい。模倣することを学んだなら、人生と慣習を手本と仰ぎ、そこから生の声をくみ取るように、と」（ホラティウス、1997: 247-8）。登場人物の行為はこうした善悪、義務や愛、そして慣習に基づき、鑑賞と批評もそれらの理解に依拠する。これらは哲学において思惟され、現実において実践されつつ論じられるものであり、バークは以下のようにこれを言及している。

「これらの物事に通暁するためには我々は哲学と世間（world）という二つの学校につくべきだとホラティウスが勧めるのもこのような事情に基づく」（OT, I: 202=1999: 28）

そしてこれらは想像力の次元の問題ではなくなるとバークは指摘している。

「想像力の仕事はその多くが決して可感的対象の再現や情念への働きかけに局限されることなく、人々（men）の習俗、性格、行動、意図や彼らの関わり合い、彼らの徳、悪徳にまで拡大するが故に、それらは判断力の領域に属することになる」（OT, I: 202=1999: 28）

パークはこの習俗の問題は判断力の次元の問題であると整理する。そしてパークによれば、趣味は一般的にはこの判断力の次元で問われるものである。作品の良し悪しの基準となる趣味は、確かに良し悪しの「判断」であろう。こうしてパークは判断力に言及する。

「特に優れた意味において趣味と呼ばれるもの、そして実際のところそれは一層洗練された判断力だが、それは、その大部分が、我々の習俗と、時間と場所および礼節一般 (decency in general) の決まり事における、あのホラティウスが我々に推奨した学校で始めて習得される技術である。全体として、趣味と呼ばれているものは、最も普通に解される場合、一つの単純観念ではなく、一部分は一次的な感覚の快と二次的な想像力の快の知覚から、さらにこれにこれらの快の様々な関係および人間の情念、習俗および行為に関して推論器官が下す結論から成り立つ複合観念であると私には思われる」(OT, I: 206=1999: 28-9)

ここで判断力は「我々の習俗」における技術であり「時間と場所および礼節一般の決まり事」における技術であると説明されている。「時間と場所」という言及からすれば古代ギリシャ、古代ローマの作品が含まれることは疑いない。ヒュームは古代の作品のうち、人間性に欠ける粗野な点を強く批判し、これの評価は趣味の範疇に含めないとしたが、パークはその点で異なっている。もちろん文明社会論者であるパークが古代の英雄の残虐な行為などを一切の留保なく称揚することはないであろうし、ヒュームの議論も理解していると思われるが、しかしパークは「時間と場所」の違いにおける習俗の差異として理解することを「判断力」の問題とし、それによって適正な評価を下すことも趣味の範疇であるとしているものと読み取れよう⁴⁾。

4) この点については「想像力」の次元でパークが取り上げた事例においても首

こうして古代と近代の習俗の差異，そして地域による習俗の差異によって発生する評価の違いをも「判断力」の次元に所属させた。ではそこで発生する評価の違いはどうなるのか。趣味の基準があるというためには，その評価の違いは趣味の違いではないことになるが，この判断力における差異は何によるものなのかに答える必要が生まれる。

バークは先ほどの引用部分で、「推論器官 (reasoning faculty) が下す結論」が判断力の次元の問題だとしていた。さらに想像力の仕事は判断力の領域に属するようになると「注意力 (attention) や推論の習慣 (the habit of reasoning) によって改善されるようになる」と論じている (OT, I: 206=1999: 28)。つまり想像力の次元で外見的多様性の原因をなすものが「知識」だったのに対し，判断力の次元では「推論」なのである。詩や演劇において何らかの情念や習俗を伴った登場人物たちが行為する。それを鑑賞し批評するには，何故そのような行為をするに至ったのか，そしてその行為を支えている情念や習俗は何か，自分たちの情念や習俗とどのような異同があるのか，といったことについての「推論」が欠かせない。そしてその「推論」は誰も全て同程度に展開できる訳ではない。ヒュームのように例えば習俗の違いと分かっているとおかつ低く評価するのは別として，習俗の違いに思いを巡らすことなく，それゆえに理解できずに低く評価する者も少なくないであろう。それは趣味の違いに還元すべきことではなく，判断力の

肯できる。バークは想像力の次元で趣味に外見的多様性が発生するのは知識の多寡のためであるとしたが，以下の例もそれを示しているとする。「バプテスマのヨハネを切り落とされた首を描いた名品がかつてトルコ皇帝に示された時に，彼は多くのことを褒めたが一つの欠点を指摘した。つまり彼は首の切り口の部分の皮が縮れ返っていないと批評したのである。(……) トルコ皇帝は他の人々がわずかに想像力の中で思い描き得るに過ぎないこの種の恐るべき光景を日常見慣れていた」(OT: 203-4=1999: 25)。バークはこの光景を「恐るべき」もので，当時もすでに現実で見ることがなくなっていると指摘している。だがあえて例として挙げており，自身の主張が「時間と空間」を問わず普遍的に妥当することを示唆しているであろう。

次元における「推論」の違いである。

この「推論」の違いが解消されれば、趣味は万人に共通することになるのか。そもそも万人が共通した「推論」を行うことがあるのか。

バークはこれを肯定する。バークは趣味の分析を感覚の次元、想像力の次元、判断力の次元に分けて論じていたが、先ほどの引用部分で、これに段階論を導入していた。「一次的な感覚の快」、「二次的な想像力の快」そして判断力が三次的である。そしてバークは基礎である第一段階を重視している。

「感覚こそは我々の全ての観念の、したがって我々の全ての快の偉大な原型であるため(……)これらの素材(引用者注 人間の情念、習俗、行為)に関して確定的推論を行うに十分な基盤が存在する」(OT, I: 206 = 1999: 29)

バークによれば「感覚の快」は万人に共通するものであった。それが「推論」の基盤であり、それゆえ「推論」も万人に共通しうるのである。

だがそれだけではない。判断力に欠陥がある場合を「間違った趣味」「悪趣味」と呼ぶとバークは整理して次のように論じているのも、「推論」の問題だからである。

「誤った趣味の原因は判断力の欠陥に他ならないが、これは知性 (understanding) の自然的な弱さによるものか、それともこれはもっと普通に見られる現象であるが、適切な正しい指導に基づく訓練の欠如によるものであろう。この訓練のみが知性を強くかつ機敏なものとするのである」(OT, I: 207 = 1999: 30)

こうして「推論」も「訓練」によって矯正され、より正しく展開されうる。したがって判断力の次元においても趣味の一般原理は存在しうると結

論づけている。

さて、バークの「趣味の論理学」をひとまず検討してきたが、ここから、バークが自らの趣味論で試みようとしたことの一部を垣間見ることができらるであろう。

バークは先行するモンテスキュー、ヒュームの議論に説得力を感じていたことはほとんど疑いなく、それらを整理して一つの論理を与えることを試みていたと言える。モンテスキューは「自然的快、趣味」と「獲得された快、趣味」という枠組みで趣味を論じようとしており、バークはその枠組みを受け入れていると思われる。このモンテスキューの議論では「自然的趣味」は存在するものの不可知的であると把握されていたが、バークが試みたのは、「自然的趣味」は必ずしも不可知的なものではなく、認識することが可能であると主張することであった。そこでバークが着目したのは、モンテスキューにおいて趣味の外見的多様性が発生するのは「獲得された趣味」である訳だが、この概念で趣味の多様化の原因を包括的に説明してしまっていることである。それを区分して内訳を考察することで、「自然的趣味」を認識することができるのではないかということである。

それに関しては、ヒュームがすでに、より具体的な原因の分析を行っている点をバークは参考に見てよいだろう。趣味の基準たる「自然的趣味」が阻害される要因に関するヒュームの分析はバークにとって極めて重要なものだった。このヒュームが列挙した具体的な分析を類型化することをバークは試みている。それにあたって、しばしば素朴に判断力の問題として扱われていた趣味の問題を、感覚、想像力、判断力の三つの次元に区分して原因論を整理するという方法を採用した。

テイストは味覚が元々の意味であるが、バークは味覚という感覚はむしろ視覚よりも「獲得された趣味」によって変化させられやすいものだとし、
「自然的趣味」が最も明確に取り出せるのは視覚であると、感覚の次元で論じているのも興味深い。だがこのバークの原因類型化の試みにおいて最も独自のものは、とりわけ想像力と判断力の次元において、自然的趣味

を妨害する原因は、それぞれ知識と推論に還元されると結論した点であろう。知識の多寡、そして推論の適不適が、本来的に万人に共通するはずの趣味を多様化させてしまうと論理化してみせている。これが必要十分なものかは置くとして、パークの「趣味の論理学」は少なくともヒュームとモンテスキューの成果を踏まえて、外見的多様化の原因類型論を試みたものと把握するべきものと思われる。

終わりに

やはりパークにとっても「趣味」は学問芸術の領域に留まるものとは考えられていない。パークは学生時代から晩年に至るまで演劇についての関心を維持していたが、若きパークはアイルランドの演劇の水準に不満を抱いており、次のように書きつけている。

「演劇は上流の人々のお気に入りの娯楽であり、演劇が自らの趣味や習俗にどれほど影響を及ぼすかについては誰しもよく分かっている。もし源泉が腐敗させられれば、趣味や習俗が墮落することは予想される。人民はジェントリーを模倣し、悪しき作家は人民を模倣する。それゆえ悪徳と愚行は、ミルトンの罪と死のように、手に手をとって一国民の間を駆け巡り、疑いなくそれが続く」(*Reformer*, I: 67)

そしてアイルランドの「趣味」「判断力」の質の問題は演劇に留まらない。製造業にまで及ぶのである。

「我々の製品に対する不満は一般的に知られているので、例を挙げて説明する必要はないが、次のことは言わせて貰いたい。こうした不満を一際声高に述べる者でも騙すのは簡単だということである。彼らは自らの知識で品物を選んではいないので、店主が外国製品だと一言宣

言すれば買っていく」（*Reformer*, I: 84-5）

「作品」や「製品」の良し悪しを自ら判断することができないことは芸術のみならず製造業、つまり経済にまで影響が及ぶと把握されている。

また晩年のバークは主著『フランス国民議会議員への手紙』で「趣味の洗練」について次のように論じた。

「趣味と気品は確かに二次的でささやかな道德の部類に数えられるにすぎないが、人生を導く上で、少なからず重要な役割を演ずる」（LNA, VIII: 316=2000: 556）

「ルソーの門弟であるフランスの指導者たちは、洗練全てを貴族主義的な性格のものとする。確かに一時代前のフランスは我々のごく自然な欲求にも雅致と威厳を付与し、その欲求の持ち主が実際よりも上の階級に属する者に見せてしまうことに全力を注いでしまっていた。フランスの指導者はルソーの手を借りて、これら貴族主義的な偏見の一掃を決心する」（LNA, VIII: 316=2000: 557）

すでに芸術は貴族の独占物ではなくなっており、したがって「趣味」もそうではないはずだが、「趣味の洗練」を貴族的なものとして貴族批判の論拠とされてしまったとバークはフランス国民議会議を分析している。

バークにおいて「趣味」は単に学問芸術の領域に留まるものではなく、文明社会とそれに依拠する政治に関わるものとして認識されていることがわかるように思われる。ここで検討したバークの「趣味について」はその基礎理論として位置づけるべきものであるということになる。

参考文献

エドモンド・バークの著作は以下のものに拠り、引用の際は略してページ数を記した。また引用に際して、中野好之による翻訳がある場合はそのページ数

も併記した。ただし訳文に変更を加えている場合がある。

OT = 「趣味について」 On taste (= 1999, 中野好之訳「趣味について」『崇高と美の観念の起源』みすず書房)

Reformer = 「リフォーマー」 The Reformer

The writings and speeches of Edmund Burke, vol. I, ed. T. O. McLoughlin and James T. Boulton, Oxford U.P.

LNA = 『フランス国民議会議員への手紙』 *Letter to a member of the National Assembly* (= 2000, 中野好之訳「フランス国民議会議員への手紙」『バーク政治経済論集 保守主義の精神』法政大学出版局)

The writings and speeches of Edmund Burke, vol. VIII, Oxford U.P.

岩撫明, 2017, 「エドモンド・バークの崇高論に関する一考察 バークの信仰との関連において」『イギリス哲学研究』40号

大河内昌, 2019, 『美学イデオロギー』名古屋大学出版会

岸本広司, 1989, 『バーク政治思想の形成』御茶の水書房

中川久定, 1994, 「批評原理の転換」『啓蒙の世紀の光の下で』岩波書店

濱下昌宏, 1993, 『18世紀イギリス美学史研究』多賀出版

ホラティウス, 1997, 岡道男訳「詩論」, 『アリストテレース詩学・ホラティウス詩論』岩波書店

Annual Register, 1758

Boulton, James, 1987, Editor's introduction, Edmund Burke, *A philosophical inquiry into the origin of our ideas of the sublime and beautiful*, Basil Blackwell

Bromwich, James, 2014, *The intellectual life of Edmund Burke*, Belknap Press

Bourke, Richard, 2015, *Empire and Revolution*, Princeton U.P.

Courtney, C. P., 1963, *Montesquieu and Burke*, Blackwell

Hume, David, 1757, Of the standard of taste, *Four dissertations*, A. Millar

Hume, David, 1985, Of the standard of taste, *Essays moral, political and literary*, Liberty Fund (= 2011, 田中敏弘訳『道徳・政治・文学論集』名古屋大学出版会)

Montesquieu, 1757, Goût, *l'Encyclopedie* Vol. VII

(本学法学部兼任講師)